

## Z109a 日本列島の星名伝承形成—音声、映像の記録より考える

北尾浩一（星の伝承研究室）

星を見て、言葉で表現し、多様で豊かな星名が形成された。言葉にメロディ、リズムが伴い、古謡、にーり、仕事歌が形成された。単にひとつの星が歌われる場合と、日が暮れてから夜が明けるまで順に一晩中の星の出を歌われる場合等、形態の多様性が見られた。ときには歌に踊り即ち身体表現を伴った。1978年より実施した沖縄・奄美、瀬戸内海、三陸海岸、さらには北海道アイヌ等を対象とする現地調査をもとに、次のような日本列島の星名伝承形成の多様性とその特徴について論じる。

・二星についての星名伝承形成の多様性：織女と牽牛は、中国から伝わったものであるが、もともと日本列島に生きる人びとは、こと座ベガ、わし座アルタイルの景観に独自のものを感じていたのではないだろうか。・カノープスの星名形成の多様性とその特徴：暮らしのなかで、星空という景観は山や海等の地上の景観との連続性がある。カノープスの場合、見える方向の地上の景観とカノープスをともに認識していた。

・プレアデス星団、オリオン、北斗七星（おおぐま座 $\alpha$   $\beta$   $\gamma$   $\delta$   $\epsilon$   $\zeta$   $\eta$ 、以下北斗七星と略す）に見られる意味する星名の変化：(i) 東北三陸地方における六連星（プレアデス星団の星名）がオリオン座の三つ星、小三つ星の星名になった事例。(ii) 九州・奄美において、ナナツボシ（北斗七星の星名）がプレアデス星団の星名になった事例。(iii) アイヌの星名において、トイタサオツ（プレアデス星団）が北斗七星の星名になった事例。(iv) 沖縄本島において、群れ星（プレアデス星団の星名）がプレアデス星団ではなく「空全体の星」を意味する事例。

星名伝承、歌、踊り等、多様なかわりのなかで日本列島の星文化が多様で豊かなものとなった。それらが時代とともに消えていくのではなく、継承されていく可能性、さらには日本列島の星名伝承の未来について考える。